

平成 28 年度 第 3 回 静岡市文化振興審議会議事録

- 1 日 時 平成 28 年 10 月 25 日 (火) 14 時～16 時
- 2 場 所 静岡市役所 本館 4 階 42 会議室
- 3 出席者 (委 員)
上利会長、家木委員、久保田委員、是永委員、田中委員、
成島委員、森委員
(市当局)
木村観光交流文化局長、豊後観光交流文化局次長、
矢澤参与兼文化振興課長、酒井課長補佐兼文化交流係長、
永田主幹兼施設管理係長、萩原文化プログラム推進係長、
三浦副主幹
- 4 傍聴者 0 人
- 5 会議内容 1 開会
2 議事
(1) 静岡市文化振興計画 (素案) の検討について
3 事務連絡
4 閉会

【会議録】

(議 事)

上利会長

議題は (1) として、素案の検討というこのひとつですので、さっそくこの議題について検討をしてきたいと思います。もうすでにお分かりだと思いますが、前回の会議の皆様のご意見を受けて、少し手直しをしたものがお手元にいつていると思います。色付けなどで修正部分がわかるように示されていますので、それではさっそく事務局の方からご説明をお願いしたいと思います。

事務局 (酒井)

< 静岡市文化振興計画 (素案) について、前回からの修正点を中心に説明 >

上利会長

今回の条例化に伴い、具体的に計画を立て、どういうことを実行し、どういうように成果を上げるのか。最後のパーセントのところがありますが、そういう数値まで設定して、これからの何年かの仕組みをきちんとやっていこうということで、全体的に文言も整理され、また色が綺麗に付けられていて、円グラフなどはほんとに見やすい

ですね。7ページ、8ページで「どちらともいえない」が、黄色で一番目立つようになっているので、ここをターゲットとして数値を上げようということをお考えなのかと深読みをしてしまいました。複雑なことが上手に図示されたり、色付けされうまくいっているのではないかと思います。

それでは皆様のご意見あるいはご質問をいただきながら、今後のパブリックコメントに向けてより整理をしていきたいということですので、自由にご意見、ご質問などをいただきたいと思います。

久保田委員

静岡まつりの実行委員長をやることになりまして、いろいろな人達と話をさせていただいている状況を踏まえてのことですが、これをみせていただいた中で、「まちは劇場」プロジェクトを推進することについて、19ページの「創造的にぎわいづくり」の中にも「まちなな空間において、大道芸、ダンス、音楽、アートなどの多彩なジャンルの文化に触れる機会を創出します」や、「路上パフォーマンスの聖地として…」と大道芸は名前として出てきているのですが、「既存のまつり等をみがきあげ…」という言葉だけが載っていて、主要事業のところには静岡まつりが載っていないので、もう少し静岡まつりについて書いていただきたい。

元々、浅間神社の廿日会祭を基にしたということもありますが、歴史的な経緯の中には政教分離などいろいろなものがありまして、静岡まつりは市民の祭りで、廿日会祭は浅間神社の祭りで神事なのだということで、別れてしまったという経緯があります。実は市長から、そこを上手く組み合わせることはできないかという命題をいただいた中で実行委員長を受けているものですから、祭事、神事、祭りを含んだ形での文化ということになると、浅間神社の廿日会祭の中で4月5日に行われる稚児舞は、ほんとに古くからあり、文化的なものに基づいて行われているもので、静岡まつりはというと、もう少し砕けた市民に受けるものとして進んできてしまいましたので、うまくすり合わせていきたいという中で、ぜひそれもひとつの文化だというお墨付きをいただくと、静岡まつりも盛り上がるのではないかと、ここでぜひ後押しをいただけたらと思いをさせていただきました。

お練りであったり、静岡まつりでやっていること、廿日会祭でやっていることも、市民の方から見るとほとんど同一に受け取られているのです。これは自分たちがやっている、これは浅間神社がやっている、これはお練りの会がやっている、実は違うものなのだと言ったりもするのですが、人から見るとだいたい同じように見えてしまう。特に、お練りをやっている方々が、自分たちのやっていることが文化なのだということをもう少ししっかり意識されてきた時に、力を持つのではないかと思います。先ほど議長がおっしゃった、黄色い部分をどちらに引っ張るかということですが、自分たちのやっていることを文化だと思っていない人が多いのではないかと思います。我々から見ると文化そのものだと思いますので、その辺を少し褒めてあげることによって、私達のやっていることは文化なのだ意識するようになってくると、いろいろな意味で盛り上がりがでたり、誇りがでてくるのではないかと思います。

もうひとつ、大御所花見行列に参加したり、いろいろな方々を呼んでそこに出ても

らうということも含めて、まちは劇場的な部分も静岡まつりの中にはたくさんあって、夜桜乱舞のような踊りもひとつの文化として捉えていただけたらと思うので、ぜひ静岡まつりをもう少し書いていただきたい。

上利会長

その意見に対して、反対のご意見はないと思います。ただ少し気になっていることがあって、ここにサブカルチャーと書いてある問題です。文化という枠付けを行うのに、これが古い意味での文化ということになると、制限を加えることになってしまうのですが、文化を大切にしながら、新しいタイプの文化も受け入れて融合していかなければならないので、サブカルチャーとハイアートとか、ハイカルチャーなどという枠組みはもはや捨てないとだめだと思います。いわゆる、「文化です。」と若い人たちがやっているものを規定して枠付けするというよりも、それも新しい文化としてまとめて、静岡としても非常に期待しているという視点を持ってもらいながら、新しいまちづくりに参加しているのだという意識を持ってもらうことが大切だと思います。文言としては、サブカルチャーというのは外して、もっと上手な表現があるのではないかと思います。

田中委員

稚児舞は元々建徳寺のものなので、その歴史を紐解いていくと、文字どおり静岡の歴史文化を紐解くことになるのですね。今は、ほとんど若い人たちには認識されていないことも考えれば、そういうものをきちっと取り上げたほうがいいですね。

久保田委員

静岡まつりをどこかに入れた時に、静岡まつり実行委員会でやっている市民のお祭りも、浅間神社の廿日会祭も上手く抱合する形で、例えば「浅間神社の廿日会祭に源を発している静岡まつり」といったように、祭り全体を文化として応援するという形が出てくると、我々としては非常にやりやすくなる。正直に言いますと、静岡まつり実行委員会は20年前にできた組織で、まだまだ文化とは言えないのではないかと、浅間神社がやっていることこそ文化なのだという、対立行動的なものになってきてしまっていて、そこをどちらも歩み寄りたいたいという思いでやらせていただいているので、そこも入れていただくことができるだろうか。

上利会長

静岡まつりは廿日会祭に由来するものでなく、静鉄が始めたイベントだと聞いたような気がしましたがどうですか。

久保田委員

それは違います。廿日会祭に由来しています。廿日会祭はご存じのように、旧暦2月20日にやっていたもので、明治の初年の旧暦2月20日が4月5日だったのです。明治時代から4月5日に定めようと決めて、それからずっと神事も行われているとい

うことですので、静岡鉄道という話ではありません。

上利会長

廿日会祭は、江戸時代に駿府のまちの町がそれぞれ持ち回りでやっていたので、あれを神事というように考えるのか、町民の祭りと考えていいのか。これを町民の祭りとして捉えていけば、今やっている静岡市の町民のお祭りと、実は重なっていくのではないかと、対立しないのではないかとと思いますが、ややこしい歴史の話があるので。

久保田委員

その当時の5府中 96カ町ということになると、安倍川の向こうは無いし、駅南も無いということになります。このあたりの馬場町などの名前がついている町名だけで、そこから出てきた人たちが新進事業として行っているのがいわゆるお練りであって、それを神様に奉納しています。

神様に奉納する中心になっているものは稚児舞で、そのお祭り自身、神事自身は稚児舞と一緒にあって、その稚児舞を舞った稚児さんが神がかって、それを拝むとご利益があるというようなことが、祭りの本体そのものということをして浅間神社からお伺いしている。静岡まつりは、もっとまわりにもいろいろなことがあって、例えば大御所花見行列について言えば、1600年からちょうど真田丸でやっている時期、ここにいらっしやった徳川家康公が、城下や浅間神社に花が咲いたので花見に行こうと行列をしたということで作られたフィクションだと思います。大道芸については文化として載っていますが、静岡まつりも載せていただければありがたい。

上利会長

稚児舞に関しては、10数年前から秋もやるようになったのですが、あれは続いているものなのですか。

久保田委員

秋はやっていません。

上利会長

中秋の頃に、やったことがあって、私も観にいったことがあるのですが、やはりやっていないのですね。

久保田委員

稚児舞ではありません。先々週あたりに浅間神社でやった神楽は、静岡のオクシズの方のものを全部集めて8時間くらいやりました。

上利会長

第1回の時に行ってみたのですが、その時は稚児舞をやっていました。中秋の周りだけではなくて、清水でやっている羽衣ですとか、あのような話はぜんぜん出てこな

いのですが、あれは市としてはタッチしていないというか、関係ないということなの
でしょうか。

事務局（矢澤）

実行委員会に補助金を出しています。

上利会長

これはどこにも入っていないのでしょうか。関連しているから入っているかと思っ
ていたのですが、入れようと思ったらもっとあるのでしょうか。

文言として静岡まつりを入れて、ここに入っているからという形で、実際にやってい
る人たちを後押しするとか、意識を持ってもらうようにするということですね。

久保田委員

我々のやっていることはやはり文化なのだ、ここにもちゃんと書いてあるというこ
とになれば、誇りを持ってやるようになるのではないか。より意味を持って、取り組
めるような気がするのですが。

上利会長

市としての期待のまなざしがここにあるようにということですね。

家木委員

指標のところになります。文化事業に常日頃から参加するということについて、
山間地域と中心市街地の人たちとの温度差がすごく大きいのではないか。山間地域の
人が、どのように文化事業に参加できるのかということを考えないと、伸びていかな
いのではないかという気がしますがいかがでしょうか。

上利会長

つまり、ここに書いてあることが、基本的にまちの中心のことが多いということ
ですね。この問題は、山間地域の人がまちのイベントにどのように参加、体験するの
かという問題と、もうひとつ、山間地域の文化というものをどのように考えるかとい
うことが裏に隠れていると思いますが、それは事務局の方にお伺いするのがよろし
いでしょうか。

豊後観光交流文化局次長

浅間神社で開催した大神楽祭りというのは、文化財課が音頭をとったもので、オク
シズの神楽を一堂に集めて、浅間神社をお借りして、中心市街地の方々に中山間地
の文化をご披露したいということで開催し、大変盛況でした。中山間地の方々に中心
市街地に出てきていただくこと、また中心市街地でやっている、例えばAOIのアウ
トリーチとして山間地での事業展開もあると思いますので、それぞれのものが行き来
するということは実際にやっていますが、先ほど会長がおっしゃったように、人がどの

ように動くかというのは次の問題だと思います。

上利会長

できれば、そういったことも考えるということも、文言として入れたほうがいいのではないかと思います。

成島委員

今のところに関連するのですが、2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて私たちが考えているのは、静岡だと中心市街地ということでいろいろなことが起きていますが、今見えていない人材というか、例えば障害者の方だったり、これから高齢化社会になっていく方たちだったり、あるいは外国の方たちのような、今まだここにはいない人々というのをどうするかというところもひとつあると思います。今ここに出ている文化を育てていくというもの、比較的しっかり静岡を地元だと思っている、定着している人たちの家庭みたいなものがある程度想定されているように感じるのですが、転入者であったり、外からの人あるいはここに表れていない人々というのが見えてくるようにするというのがひとつ、オリンピック・パラリンピックというものに向けてやらなくてはいけないことだと思うので、そういった人たちをどうしていくのかという視点があるといいと思いました。

上利会長

そうすると、例えば視点3の「にぎわいづくり」の世代を超えた交流というのがあるので、これをただ世代の問題ではなくてということですね。今の問題は、人づくりの問題とも言えますね。

成島委員

何年後かの静岡市というものが、今の構成をしている地元出身で地元のことを好きという人とはまた少し違う構成員で考えて、そのことも視野に入れていかないと、たぶん人口流出問題はなかなか歯止めがきかないだろうと思うので、どう多様な人を受け入れていくのかということ、もう少し踏み込んでとらえてもいいのかと思います。

上利会長

イメージとしては、例えば障害者ということであれば、一般には障害者も住みやすいまちづくりをと今までは言われてきたのを、パラリンピックに合わせて、障害者に特化したイベントを企画するとか、最近では、体験型の外国人観光者が増えていたりするので、そういう人たちがネットなどで検索して行ってみたいと思わせるということですね。

成島委員

そういう人たちがいるということ、静岡にいる人も受け入れていくということ、少し外に開いた、発信できるような何かがあるといいと思います。

久保田委員

大御所花見行列をやる時には、大工組合から何人、なんとか組合から何人出てくださいとなるわけですが、人数が減ってしまっていて、毎年やる人が同じだったり、だんだんお年寄りになってしまっていて、あの人をやめてしまうとうちの組合は受けられませんかといった話になってきてしまう。祭りの実行委員会としても何かの形で、そこを外国人にやってもらえないか、女性にやってもらえないか、外からの訪問者にやってもらえないかということができるよう、そういうことによって、参加型のお祭りを作ろうとしている。

それと同時に、まつり実行委員会全体はボランティアで成り立っているのですが、その中にいる人間は、やはり今のところはおまちの人間で、そこに周りから入ってきてもらって組織を変えていかななくてはならないということを重要な課題として取り組んでいるところでもあります。特に、観光客を祭りで歩かせたらどうかということに関しては、商品づくりまでを含めて、泊まってもらって、歩いてもらって、そのかわりお金をいただくということができるのが見えてきていますので、それも文化のひとつとして位置付けてもらうことは、やはりうれしいというか、単なる経済活動や遊びということより、文化の担い手として外の人も受け入れますということが「創造的にぎわいづくり」なのか、「創造的人づくり」にもなるのか、会長がおっしゃったように、よそ者を受け入れましょうみたいなことを書いてもらえると、我々が今やろうとしていることを後押ししていただけるのではないかと思います。

成島委員

在住の外国人の方とかにも、字幕がありますというような形で実験事業を行ったりするのですが、やはり情報のピックアップが難しいということだったり、来ていただくと文化というものを楽しんでいただくのですが、やはり分断されている。障害者の方も、特別支援学校という学校教育の中までは私達に関わることができるのですが、社会に出た後は、途端にこう姿が見えなくなってしまうということとか、実は分断されている部分というのを何とかしたいと思っているのですが。

上利会長

そういうオープンなまちの雰囲気や伝わることも、少し考えていただければと思います。

事務局（矢澤）

19ページの「にぎわいづくり」の下からふたつめのところに、既存のまつりにうんぬんとありますが、「世代を超えた交流の活性化」というところを、「世代や地域を越えた交流」とするのはどうでしょうか。

久保田委員

大道芸は実際に、外からの客が多く国籍を超えていますし、静岡まつりのひとつとして行われる朝鮮通信使の話なども、国籍を超えている話でもありますので、世代や

国籍、地域を越えた交流の活性化というところはコンセプト的には問題ないのではと思います。

上利会長

今、成島さんがおっしゃったことはすごく重要なことだと思います。日本の中でいろいろなところに行ってみると、近江八幡などは文化資源を上手に活用しながら、観光客が常にどんどん入ってくる仕組みができています。あのよう、まちがそこに住んでいる人たちだけで自己完結するのではなくて、常に人が流れ込むような仕組みができていくという。観光という視点ですが、それが歴史と結びつき地元の人もそれを誇りに思って支え、他の人も常に入っていく、そういう交流が起こるということをつぶしおっしゃっている、これは地域を越えたという言葉ではなかなか表現できないのではないかと思います。

久保田委員

視点2の「創造的魅惑づくり」の真ん中に「静岡型体験観光の推進」というのが入っていますが、これも少しからんでいるのではないかと思います。

家木委員

カンヌウイークというのがありますが、あれをもう少し宣伝したらどうですか。

森委員

カンヌウイークのアンバサダーをやっています。だんだん、おいしいワインが飲めるお祭りみたいな少し違う方向にいつているのではないかと思いますけれども、今年でカンヌ市と静岡市が姉妹都市になって25年。すばらしい年だと思うのですが、それこそ文化の交流が現地とできたらいいと思います。もちろんお金もかかると思うので、なかなか難しそうだという壁で今一歩前に進めませんが。

木村観光交流文化局長

補足ですが、これまで25年の歴史がありながらわりと静岡市に対して冷たい感じがありましたが、市長が交代したらそういう縁を大事にしたいということで、来年のカンヌ映画祭に市長を招待したいという話をいただいております。正式に招待状が来た段階で、どうするか判断することになりますが、これまでの25年の歴史がありながら本当に冷たいと思っていましたが、ようやく正常な姿になることができたと考えています。

森委員

このうれしい喜びを市民の皆さんもわからないと、携わっている人たちだけがうれしいというのでは地域と一体化していかないと思うので、どうすれば自分のことのように、楽しいと思っただけのかが大切だと思っています。

木村観光交流文化局長

家木委員のおっしゃったように、「シズ×カン」というものも順調に進み出して、だんだん進化してきたという状況です。

久保田委員

カンヌウイークはいつでしたか。

木村観光交流文化局長

5月の、第2週か第3週あたりです。

上利会長

それは、どのあたりに入るのでしょうか。にぎわいでしょうか。一番下のところの、「市内の、いつ、どこで、どんなことがおこなわれているのか、「静岡がおもしろい！」の情報発信」というのは、静岡の中のおもしろいことを外に伝えますということですね。今の話は、静岡とよそとの交流ににぎわいがあって、向こうの情報もこちらに入ってこなければならぬし、静岡に住んでいる人が、今はどこでどんなものが味わえるといったものが盛り込めればよいということですね。

森委員

静岡が好きで住んでいる人もいれば、生まれが静岡だから何も考えずに静岡にいるということで、無意識で興味がない人も本当の静岡人ということもあると思います。静岡に生まれたから静岡に住んでいる、そういう人達を覚醒させるようなにぎわいもあったらいいと思います。

いつ、どこで、何が、行われているというのがわかりにくいということもあります。意外といろいろなことが起こっているのに、後で知った、ニュースで知ったみたいな。

田中委員

市のホームページは、多言語化というのはどのくらいですか。

木村観光交流文化局長

市のホームページも多言語化しています。特に観光情報に関しては、観光コンベンション協会のほうで4か国語対応していますがまだまだ少ない。もう少しマルチ言語にしたいと思っています。

上利会長

市内の中というか、まちなかは多言語化されているのですか。

木村観光交流文化局長

やる計画はあるのですが、なかなか一気に進んでいないというのが正直なところです。これはある時に集中的にやっってしまうと、なかなか逐次的にはいかない

思いますので、予算を要求しながら進めたいと思います。

よく、駅を降りて駿府城公園はどちらにいったらいいかわからないという苦情があって、また観光案内所の位置がわかりにくくてということで、今、予算をとってわかるようなサインを考えています。

静岡市に住んでいる人の特徴かもしれないですが、自分はわかるけれどもビジターの目線が無いのです。いわゆる初めて来た人にとっては、なかなか不親切だという、親身な方はおっしゃっていただけるのですが、外からのビジターの目線で案内とかそういうものやっけていかななくてはならないと、職員も市民目線、ビジター目線で物事に当たるようにということを田辺市長が口を酸っぱくして言っていますので、これが徐々に広まってきて、道まだ半ばというところです。

上利会長

私も、あその場所がわからないですね。以前、名古屋駅に行った時にコンコースのど真ん中に案内所があって、美術館をいくつかまわるという仕事で行ったのですが、そういうものありますかと聞いたら、すぐに美術館の一覧のマップが出てきて、よくできていると感心したことがあるのですが、そこまでいくかどうかですが、そういう努力もということですね。

久保田委員

「しずおか文化の特徴」の中に人々の性格も温和でということが書いてありますが、不親切でやっているのではなくて、大元に流れている静岡人のマインドがありまして、基本的に「そんなたいしたことではないので威張れない。」という気持ちがあってこうなってしまうのです。

一回外に出て帰ってきたものとして「いや、たいしたことあるよ。」と一生懸命言うのですが、だいたい他の人は「そんなたいしたことはない。」「田舎だし。」と卑下する人が多くて、「お城と言っても天守閣がないから。」とマイナスイメージのことをつい言うてしまう。たぶんあの位のものがあつたら、もっと普通は自慢するのです。「いいものがあるから見て行きな」みたいになるのですが、「いえ、たいしたことない」というようになっていきますので、人が悪くて教えないという不親切ではなくて、「そんなところにお金をかけていいのか」、「そんなたいしたものではない」とすぐに思ってしまうところです。

上利会長

うちにはこんなものがあると自慢ばかりするよりも、そういう穏やかなマイルドマインドを持っているだけで、逆にそれがお茶などを飲んでおもてなしというそういう世界もありますね。

家木委員

これは直接関係ないのですが、阪神淡路大震災以降、地域力という言葉をよく耳にしたのですが、地域力があってこそ文化力が成長しているといえると思うのですが、

地域力という言葉が出てきていないので、地域力ということについてどのようなお考えをお持ちですか。

上利会長

ここは文化振興課の文化のちからということなので、総合的にはもう少し違うのかと思いますけれども、文化のちからの原点にあるのは、まちのちからだったり地域のちからだったりするのではないですかと、そこの関連はどうでしょうかということなのだと思いますが。地域力とは何でしょうか。まちの人たちが、みんなお互いのことを信頼し合って助け合うような基盤となるということですか。どのレベルで考えればいいのかということですね。もっと基礎的な基盤が整っているかという、交通や通信のようなものも地域力なのでしょうけれども。

田中委員

定義付けをどのような感じでどうすればいいかわかりませんが、文化だけに限っては少し言いようが無いですね。

上利会長

今ここでどうするかという議論ではないと思いますが、この文化の力というのは、結局はトータルで地域の力に繋がっていないといけないだろうということはそうなのだと思います。家木委員がおっしゃったように、直接素案づくりそのものとは関係ないことだと思いますがという前置きがありましたので、このあたりをどう入れるかということはさておき、そういうことも皆で共有して考えておくひとつの視点だろうということですね。

成島委員

コミュニティが普段から、どういうつながりを持って我々が生活しているかということが、何かあった時に発揮される地域力というのに役に立つと思うのです。それから、普段からどういうようにという中に、文化というものが果たす役割というか果たせる力というものがあるのだろうと思います。

上利会長

小さいところで言うと、組の回覧板のようなことから始まって、もう少し大きいところで言うと生涯学習センターのような地域があって、次に区があって市があると。それぞれの中でどういう交友関係ができていくかが、例えば生涯学習センターで時々こういうイベントがある。ただ、ここのところくらいまでは皆の視線はいつていると思うのです。いろいろなレベルが重なりあって、イベントの大きいものをポンとひとつだけでなく、地域のもっと下に降りているものがあればいいのだと思います。

成島委員

この中に、学校教育のことが少し書かれていましたけれども、教育というのは学校

だけではなくて、地域の人たちが担っていくという作りも関係してくると思います。

上利会長

だいぶ前に、駿河区の区民懇話会にいた時に、皆で地元の駿河区の文化や歴史を知ろうということでツアーのバスを出したのですが、それを葵区もやったと聞きました。もう少し下のところで自分たちの歴史文化を見ましようという、あのようなものはまだ続いているのですか。

木村観光交流文化局長

続いております。いわゆる自分たちの郷土を誇りに思う気持ち、それが歴史であり文化であるわけです。そういうことをきっかけに、災害の時に一番上手くいっている単位というのは、もともと組というか生活単位がしっかりしているところなのです。自助・共助の部分がしっかりしているところは、逆に地域の文化を大事にして、お祭りとかをやっていて、普段からそういうコミュニティが出来上がっているのです。やはり、そのコミュニティを大事にしていると、いざという時に非常に役に立つという形なのですが、そのツールというわけではないのですが、文化というのがそれを形成するのにけっこう大きな力があるのではないかと思います。

先ほど久保田委員がおっしゃったように、よく観光客がタクシーに「1時間あるからどこか見る所はありませんか。」と言った時に、タクシーの人たちが「あまり見るところが無いんだよね。」と言うのが、あれは静岡人特有の謙遜したところで、そうではなくてやはりそこは、教育とタイアップして、いかに我々の郷土というもの、先人から今に伝わる伝統もあり、文化もあり、歴史もあるのだというそういう郷土教育をしてビジターの方に「おらのまちはすごいんだ。」という、ヨーロッパはそれで上手くいっているということを聞いていますので、そんなまちにできたら、それが最終的には地域力に繋がるのではないかと考えています。

久保田委員

例えば、お祭りを担っているそれぞれの連合町内会の連があります。ここで連を作ってください。夜桜乱舞のこういう連があります。それからなんとか町内でこのお練りに参加してくださいということについて言えば、どんどん力が衰えています。それは地域力そのものがどんどん衰えていくことが目に見えていて、どんどん高齢化すると同時に、若い人たちはそれに参加してこない。そういう部分でみんな苦勞してしまって、おじいちゃん、おばあちゃんと小さいお子さんたちで中間層がない。中学校、高校がそれを文化として認めてくれていないので、学校の方が大事になっている。4月なのでほとんど新学期が始まっていますが、昔は静岡まつりまで休んでから授業が始まっていました。その中間の一番力強いはずのお祭りなるものが消えていってしまい、その人たちは戻ってこないと考えたら、今の言い方でいうと、地域力が危機的な状況になってきてしまっているということで、それはやはり、文化として見るということ強く出して、学校教育に投げかけていくことができたらと思います。

上利会長

私は少し違う考え方で、今のような交通とか通信の手段ができていない、例えば歩くことが中心であると、当然働く場も子どもたちの場もある地域に限定されていく。それが明治に入って、鉄道ができてやがて自動車ができる電車に乗って通学したりするようになると、地域が拡散するのが必然であって、それを無理やり地域のものとして保存しようとするのはやや無理があるのではないか。ただ、それは意味がないとは思わないのですが、この地域は江戸時代に、こういう裁量があってこんなお祭りができているということを理解していく、先ほどの神楽のようにいろいろなものを子どもたちが知っておく。随分前に、私はそこの子どもでやれと言われてやっていますみたいな人がいたけれども、ある程度のことは知っておいたほうがいいと思います。今のような形になってくると、かつての地域力と違う地域力を作らなければいけないのだと思います。

例えば車を持っている、電車があるということで、今までは行かなかったところの文化に参加できるようになってきているので、新しいタイプの地域を創ってあげたい。でも、かつての歴史をきちんと知りながらということが前提だと思うのです。少し話がそれてしまいますが、地震の時の話なのですが、東京の関東大震災があった時に水道が止まってしまい、私は谷中に住んでいたのですが、その地域でグループを作っていて、調査をしたらその地域にはまだ井戸が残っていて、おばあさんたちがそのことを知っていて、封鎖されていた井戸をもう一回作って水を供給できたとか、今のは文化とは違うのだらうと思いますが、お祭りを含めて地域のいろいろなことを知っておくこと、そういうものの上に、ここで議論するような新しい文化というものがあって、いろいろなレベルを保っていくというのが重要なのだと思います。この地域力が、地域限定のお祭りのように考えられてしまうと、うまくいかないのではないかという気がします。

久保田委員

そういう意味で言えば、町内会のようなものが結集軸になり得ない、もっと広がってしまっているというのは確かにそのとおりです。その次に結集軸になり得る何かとして、一番具体的な名前として出てくるのが学区です。小学校、中学校くらいの大きさの単位があって、そこが参加してくてくれるというのうれしいことなのですが、残念ながら学校教育においては政教分離みたいなものがあり、昔に比べるとそれについては文化とせずに、宗教行事としてみるのでやらないという形になってきたのがこのところなんです。学区というのが一番親も入りやすいのですが、本当のことを言うと、一緒になりやすいけれどそここのところが実は生きてこない。昔のような、おじいちゃん、おばあちゃんの町内会でやっていると人が集まらない。会長がおっしゃっていたように、もっと広く集めてやればいい。昔ながらをリフューズしているわけではないのですが、できれば学校教育的なところにまで文化のほうからいければ、手が届くかと思えます。

上利会長

私も、それは大切だと思います。広くここで議論するような文化の問題もあるけれど、学区というのは、皆が歩いて通えるところが基本となっていると思うのです。防災も、やはり学校などが避難地になっていたりするわけで、そこをどういうように文化と関連付けるかという、今のアウトリーチのように学校に出ていくとか、生涯学習センターを使うとか、そういうタイプのこともどこかで押さえながら、フェイストゥフェイスで顔を見て、あの人だからどうにかしてあげようということも出てくるわけなので、その力をどうキープするかということです。

久保田委員

何らかの形で学校と書いてあるところがありました。

事務局（矢澤）

23 ページの、推進体制の教育機関に期待される役割の中に記載をさせていただいております。文化に触れる機会の充実とか、豊かな情操を養うための文化教育が重要になると、学校や施設間の連携によって、次代の文化を担う人材の育成を図るということで、こちらにはあげさせていただいております。

成島委員

お祭りに参加する町内とか学校とかの単位が減ってきているというのはすごくよくわかります。私も、いざ参加してくださいと言われても、参加できるかという結構難しい世代というか、たぶん町内の行事にもなかなか参加できない。私は独身で子どもがいないという時点で、コミュニティの中ではどこにも入れないような、地元なのだけれどもよそ者のような感じになっているのではないですか。こういうマイノリティも、アクセスできる感じがあるといいだろうと思います。一方で学区の問題として、静岡は学区によって土地の値段が違う。同僚などの転入者で、子どもが生まれ、家を持とうかという世代がいるのですが、静岡に来てびっくりするのは、学区によって土地の値段がぜんぜん違うということです。地元の人はいくらも思っていないのかもしれませんが、少しブランド志向みたいな、何で判断するかというところも、少し内向きだと思ったりするのですが、私のような者も関われる、昔からのお祭りではない、別のフックみたいなものがあったりするのだらうと思います。

上利会長

学校でやるとどうしても学校関係者になってくるので、この 23 ページのところの教育機関は、学校、図書館、博物館うんぬんとなっているので、図書館などは重要な役割を果たせるのではないかという気がします。そこでいわゆる地域限定ではないようなイベントや文化というものを起こせばということも。どういうフックとおっしゃったのか、どういう向きで何があるといいとおっしゃったのか、アウトリーチで演奏会があるということとは違うのですか。

田中委員

静岡はそこまでいっていないのですが、例えば京都などはまちが空洞化して、かつて町衆が作った明治以来の小学校がほとんど廃校や統合になってきていて、そこに文化センターの機能を持たせています。今後は、文化庁も文化センターのひとつに移ってしまいますし、かなり大きないろいろな芸術活動、プロもアマチュアも含めてそういうようになっている。そこまでなってしまうと学校がセンター的な機能になりうるのですが、幸か不幸か静岡の中心地はまだそこまでいっていません。むしろなるとしたら中山間地です。

久保田委員

青葉小が無くなったのは、正にまちに子どもがいなくなったからです。地域力というか、子どもを中心とした地域力が減ったのです。歴史文化センターを作ろうとしているのは明らかにそこです。もうひとつ、22 ページの事業者に期待する役割として我々が一番困っているのは、大正や昭和初期の話だと言われてしまうかもしれませんが、昔は4月の1日から5日までは、学校が休みだし、ほとんどの会社も休みでした。浮月楼の女中さんが30人位で同じ着物を着て踊ったりしている、そんな写真が出てきて、それが静岡まつりだったのです。それに対する企業の後押しが当たり前のようであったのですが、今は、それがほとんどないのです。そういうことに関しては、事業者もだいぶ弱っているというか、関係ないと思っているところがある。そのところを文化なのでということの後押ししてもらいたいというのがあります。

事務局（矢澤）

学校と地域の関わりというと、静岡市の教育委員会がコミュニティスクールという取組をしています。実際には、江尻小学校が第1番目として、今3校くらいが導入部分として検証を進めています。このコミュニティスクールとは何かと言いますと、地域の住民の方に積極的に学校に入っていただいて、近所のおじさんがいつの間にか廃材を使って家具を作ってくれたり、実際にそういうものを見せてくれたり、地域の方々に先生のようにいろいろな分野を教えていただく。実際に学校に入り込んで子どもたちに、いろいろなものづくりにしてもお話にしてもということを経済委員会も進めていますので、直接文化の計画の中に落とし込むということではなくて、教育振興基本計画の中では取り組んでおりますので、今後そういうコミュニティスクール化を積極的に静岡市も押し進めていくのではないかと考えております。それと、図書館のお話も先ほど出ましたけれども、中山間地との関わりという意味で言いますと、図書館の場合は市内に12館しかございませんので、中山間地になかなか本を届けるのも難しいということで、バスで1週間に一度、10か所程度のステーションを回る移動図書館という事業をしています。それとは別に夏休みについては、中山間地の6校程度の小学校に、移動図書館と一緒にパフォーマーなどを派遣し、現地でパフォーマンスを見ていただいて本を借りていただくという事業をしているので、図書館も文化のひとつの大きな担い手として、今はどちらかという教育機関のひとつとしての意味合いが強いのですが、今後図書館自体も利用者数や貸出数なんかも右肩下がりで減少し

ていく中で、文化に繋がった事業展開というのかなりここ数年拡大しているというところがございます。

上利会長

東京にいた頃もよく利用していたので、移動バスでというのはよくわかりますし、それは利用価値があると思います。でも、それは個人におけるというところで完結してしまうのですが、今おっしゃったように、それと連動した何かイベントがあればおもしろい。正に、地域に根付いたところと関係した文化づくりだと思いました。少し地域の問題に話が集中してしまって、それほど時間も残っていないので、いろいろな角度からご意見いただければと思います。

是永委員

文化協会ですが、やはり高齢化で、浜松は「やらまいか精神」なんですが、静岡は「やめまいか精神」で、新しいことを提案すると「そんな面倒くさいことするな」と言う。このことで意識改革をしてもらうために、意識改革を表面に出していただいて、意味のあるものにしてほしいという感じを受けています。

上利会長

意識改革というのは、こんなのいいじゃないかと思うのを、これが大切だと思うというような、どういうイメージでおっしゃっているのでしょうか。

是永委員

積極性が文章にはあるのですが、静岡の人は高齢化すると積極的でない。現状でいいじゃないかということがあるのです。先ほど話した中間層はなかなか入ってこない。私どもは、学校で放課後教室として書道をやっている、20~30人かと思っていたのが100人単位で集まったという形で、いろいろなことを子どもたちに伝えるということをやっている。ですが、そういうことに対して、高齢者というのはなかなかうまくいかないもので「もういい、充分だよ。」と言われるものですから。

上利会長

それは文化協会のいろいろな文化団体に属している人たちの平均年齢がどんどん上がっているということなのですね。新しい人が入って来にくいということですか。

是永委員

にくいというか、この前の文化講演会で話を聞いたら、お金がかかるから若い人は文化をやらないというような意識もあると。お金と結びつけばやるんだよと講演会で言われたのですが、それと、文化とは違うのではないかという話もあると思うのですが。

上利会長

それは、今までの文化団体のようなものとは違う形で、若い人たちが文化に接しているということとは関係ないのでしょうか。例えばスマホでとか、今までのような学校のクラブ活動のような、例えば写真部が写真をやるとか、そういうものとは違ったタイプの活動をしているような気がしますけどどうなのでしょう。そうすると、団体という形では、今の若い人たちは組織化しないということでしょうか。大学でもかつてのようなクラブではなくて、サークルなども軽い感じで接して、楽しければいいというのもいろいろ問題だと言われたりもするのですが、その意識を変えるというのは、若い人も団体に属してというのを望めるのかどうかということなのでしょう。

是永委員

望めないのではなく、望んでほしいという意欲の問題ですよ。

久保田委員

2 ページ目に書いてある計画の位置付けのすぐ上の「しずおか文化の特徴」の最後のところに、「大道芸ワールドカップ in 静岡に続く新たな取組や文化施設を核として世界レベルの文化の発信を進め静岡市として個性を発揮すべきだといえます」というところがありますが、言ってみれば決意表明としてここをもっと強く、例えば先ほどの話だと、「やめまいか。」ではなく、もっと積極的に「何かやりましょう。」ということはこの文言で強くしたらどうでしょうか。たいしたことではないというものではなく、自慢しましょうということだと思いますが、文化はあるのだからもう少し言いましょうということをもっと書きたいのではないかと。

是永委員

もっとインパクトがあるように、参加したいとか関わりたいとかという。

上利会長

文化協会の方からそのようなご意見をいただきましたが、高齢化でだんだんというようになっているので、文化協会としてどう考えればいろいろな団体の活動がもっと活性化するかということです。

若い人たちが少し違った方向を向いて、団体に属さなくなってきたのではないかと。そうすると、それを団体に入らなすというのも変なので、違う若い人たちの文化づくりを考えていくのか、それとも、それなりの意味があるから、文化団体へ皆が参加するように、元気が出るようにという仕組みを考えるのか。

成島委員

多様化していますから、何かの協会みたいなものに属するという時には、やはり躊躇するとか、何のメリットがあるだろうということを考えてしまって、なかなか入らないということはあると思います。

上利会長

以前は、団体に属してもっと上手な人から、いろいろな意見を聞いたり、コミュニケーションしながら自分もスキルアップしていたと思いますが、今の若い人は、ネットやスマホなどを通して、知らない人からの援助を試みながらやっているというのがあります。でもそうすると、いろいろな文化団体が高齢化で衰退してしまっているのかという問題もあります。

是永委員

私たちも、一生懸命考えてやっているわけなのです。

上利会長

文言として、そういうこともあるということを、どう入れるのがよいかということですね。

是永委員

せっかくこういうものができるのだから、勉強会みたいなものを作って意識を高める必要があるのではないかということは感じております。

豊後観光交流文化局次長

文化団体さんが先ほどおっしゃったような、放課後児童教室みたいところで活躍されているということを、今初めて知ったのですが、皆知らないと思うのです。多種多様な人材が、いろいろなことを教えられる団体だということが、なかなか知られていないということは、市の方にも責任があると思います。

17 ページのところ、「しずおか文化を担う団体等の情報の発信」をしっかりやっていこうということを具体的な施策として、「こんなこともできます。」「あんなこともできます。」ということから始めると、そういうところに食いついてくる人もいると思うと、いろいろな活動が健康とかに繋がると思うのです。確かに、組織化するか皆でつるむことが若い人は嫌いというのものもあるかと思いますが、若い人から高齢になるまでの間の40代、50代くらいの、文化団体さんからいえばまだ若手ですよ。その辺りの層は健康志向があるので、例えば歌うことが健康に繋がるとか、パフォーマンスをすることが健康に繋がるとか、いろいろな切り口があると思います。

是永委員

今、文化協会では、どういうことができますということを、情報部がやりはじめましたので。

豊後観光交流文化局次長

私どもも、もう少し応援していかなくてはならないと思います。

久保田委員

前回お話をさせていただいたプラットフォームみたいなものについて、我々のところはジャズをやっていますので、今度ジャズセッションがあるのでご参加くださいとか、森さんのところみたいにダンスをお教えしますというような、ある程度経済的な行為としてやっている部分も含めて、いろいろな情報が入ってきて、これにはお金がついている、それはついていませんといったようなことがわかると、確かに文化度が上がってくると思います。

先ほどおっしゃられた中で言うと、師弟の関係がなかなか築きにくくなってきていて、ひょっと現れてちょっとかじっていなくなるという若い人たちがたくさんいるのですが、残念ながらしょうがないという。そういうものも含めながらやっていかないと実際にはできていけないと思いますが、それらを含めて文化の担い手という形になるのではないかと。

上利会長

組織化ということではなくて、いろいろな組織の人が活躍するイベントがあって、見たり参加したりする中で、3年に一度くらい顔を出す人もいるし、わりとおもしろいと思って入ってくる人もいます。そういう場をはっきり見せたり、提供するようにすればいいということなのです。

17 ページのところの「文化団体等の交流を通じた情報交換の促進」というのがひっかかっている、何のことかと思って聞いていたのですが、もっと実態的に、こういうことがやりたいということがわかるといいのですが、これは何をイメージされていたのでしょうか。イメージがわきにくいので、こういうところをもう少しお願いできたらと思います。

家木委員

文化事業に貢献した団体でもいいし個人でも、そういう人の表彰制度があるのでしょうか。よく書道とか絵画は市長賞などがありますが、NPOをつくって自分がこうやると決めたものを一生懸命やっている団体とか個人がありますが。

事務局（矢澤）

現在は、芸術文化奨励賞というのを当課でもっておりまして、これは毎年11月の文化の日の前後に表彰をさせていただいております。今年もその頃に、表彰を予定しておりますが、文化活動をされている個人の方、あるいは団体を年1回表彰させていただく制度はあります。

家木委員

補助金というものを、団体に出しているものはありますか。

事務局（矢澤）

市で直接補助金を出すと言う制度はございませんが、文化振興財団に文化活動補助

金というものがございまして、最大 100 万円まで、文化振興財団に申請を出していただいて認められれば補助される制度はあります。

久保田委員

9 ページの、地域の文化資源のみがきあげと活用のところの列挙部分で、本市には三保松原、久能山東照宮、登呂遺跡、静岡まつり、清水みなと祭り、大道芸ワールドカップ in 静岡とありますが、ここに浅間神社と、駿府城を入れていただきたい。駿府城が残っていることは重要な文化資源だと思います。駿府城公園にする時に田辺市長も、駿府城址にするか駿府城にするか、随分悩まれたと思いますが、最近事件のあった宇都宮市では宇都宮城址公園です。

木村観光交流文化局長

一般にはそちらのほうが多いですが、思いがあつて駿府城公園にしました。

久保田委員

どちらをお選びになるかは、その辺の思いがからんでくるのではないかと思います。

上利会長

強い意見ではないのですが、駿府城と同時に、ぜひ城下町のことも考えていただきたい。駿府城のまちづくりというのは町名のことも考えて、すごく重要な歴史資源になっていると思います。

久保田委員

あるいは駿府城下という言葉にして、全部含んでしまうということもあります。

上利委員

中黒にして、駿府城の城下町など、いろいろ書き方があると思いますが、おおよそのご意見をいただきましたので、このあたりで事務局にお返しいたします。